Otemae University

ドイツ語非分離前綴に関する通時的考察

Eine diachronische Betrachtung über die deutschen Verbalpräfixe

大 島 浩 英
OSHIMA Hirohide

I. はじめに

ドイツ語非分離前綴 be-, ent-, er-, ver-, zer- は現代ドイツ語においては、独立した語ではなく、単なる語の一部分に過ぎない。こういった非分離前綴をもつ動詞の中には、前綴という意識が薄れ、その語全体として一つの概念を表すようになった語も少なくない。従ってこの前綴部分だけの意味をその基礎動詞の意味から切り離して考えるには、場合によってかなりの困難が生じるものなのだが、歴史的にみた場合、これらの前綴は本来副詞や前置詞として独立した語であって[1]、それ自体が明確な意味内容を保持していた。しかしながら時間の流れと共にこういった状況は変化していき、これらの語の形態的独立性は弱まりそれと同時に意味内容にかんしてもその独自性は薄れていった。現代においては非分離前綴となってしまったこれらの語ではあるが、その意味内容は今でもある程度までは認識されている。例えば be- には、その語の基礎を成している名詞を「付与する (bedachen)」という意味があり、また ent- には「あるものから離れる (entlaufen)」、er- では「到達、獲得 (erreichen, erhalten)」、ver- は「間違う (sich verhören)」、そして zer- では「分裂 (zerschlagen)」という具合に、それぞれの前綴には現在でも多数の意味内容が認識されているのだが、ただこういった意味の中には、その前綴が本源的にもっていた意味と、そこから派生、転用された意味の両方が混在しているという事実がある。従って本稿では、現在認められるこれら前綴の多くの意味内容が、本源的に存在していたものなのか、あるいは時間的変遷の中から現れたものなのかを考察し、その歴史的発展を跡付けてみることにする。

II. Präfix と Aktionsart

1. Präfixe be-, ent-, er-, ver-, zer-

さて、先に述べたように前綴には様々な意味が認められ、それらの意味が、あるときは類似し (erlöschen - verlöschen, bedecken - verdecken) 、またあるときは対立関係を表わしたり (erblühen - verblühen, ermutigen - entmutigen) するのだが、それぞ

NII-Electronic Library Service

Otemae University

れの前綴がもっている具体的な意味内容にかんして、それらすべてに共通するものというと、「基礎動詞の意味を強調する」という性質しか考えられないのではないだろうか。ここで、具体的意味ということを離れ、Präfix の機能という観点からみると、まずヴァレンツに対する作用、例えば他動詞化現象（auf etwas fahren – etwas befahren, auf etwas steigen – etwas ersteigen）と、grammatisch でもありまた semantisch でもある Aktionsart に対する作用が、各前綴に共通して存在する機能であると考えられる。

そこでまず be- について考えてみると、be- には強い他動詞化作用があるのだが、これと関連して Aktionsart への影響については、„etwas besteigen（resultativ）, etwas betreten（punktuell）“という動作相の変化があり、さらに ent- では„entbrennen（inchoativ）“、er-では „erarbeiten（resultativ）, erklingen（inchoativ/punktuell）“、ver-では „verblühen（resultativ）“、zer- では „zerdrücken（resultativ）“というように、すべての前綴が、動作の開始や終了、完結といった完了的な意味合い（perfektiv）を動作相に与えている。[2] 従って、この「動作相の完了化」という作用が、Präfix 全般に関していえる一般的な機能と考えることができる。

2．Präfix ge-

さてここで、Aktionsart に対する完了化作用が最も顕著に現れている前綴として ge- の存在がある。ge- は、現在ではもはや、造語能力や具体的意味内容をもたず[3]、そのため専らその完了化機能だけが強調されることが多いのだが、それではなぜ前綴 ge- が現在のような働きをするようになったのかを考えてみることにする。

ge- は一般に、継続相の動作に対して開始や終了、結果といった時間的な制限を加えるものと考えられているが（ahd. bëran „tragen“ → nhd. gebären）、ge- は本来、前置詞として存在していたものであった。Paul[4] の記述によると、すでに Urgermanisch の時代から合成語においてのみ用いられたとされており、従ってかなり早い時期に ge- はその独立性を失っていたことがわかる。そしてその当時この前綴がもっていた意味は „das Zusammensein, die Vereinigung; zusammen, mit（Duden-Etymologie）“という、空間性を表現するものであった。この意味を保持している語として„gerinnen“[5] が挙げられる。しかし、例えば„Milch, die gerinnt.“の gerinnt は zusammenrinnt → hat aufgehört zu rinnen（Trübner）と解釈され、あるいはまた „ga-rinnan = fest werden“というような resultativ 的意味が発生するに至り[6]、この gerinnen の前綴 ge- は、このようにしてその本来の空間的意味を失い、Aktionsart に対する完了化機能のみをもつようになったのである。さてそうすると、本来の空間的意味が時の流れと共に消滅していってしまったのはなぜであろうか。これに対して Trübner[7] では次のような説明がなされている。例えば、ge- と同様に完了的意味をもつようになった前綴 ab-,

NII-Electronic Library Service

Otemae University

an-, aus- などは、それぞれがまったく同じ形態のままで独立した前置詞としても存在している。このように前綴と並んで前置詞としても存在することによって、その空間的意味が常に意識され、そのために、これら ab-, an-, aus- などが前綴として用いられる場合にも、前置詞からの類推でその空間的意味が常に保持されるのである。これに対して ge- の場合は、空間的意味をもった前置詞としての機能をかなり早い時期に失ってしまったために、前置詞からの類推が効かなくなり、専ら完了化の機能のみを発達させる結果となったのである。こういった考え方は ge- に限らず、前置詞としての機能を失った非分離前綴全般に関してもいえることであろう。当初は Aktionsart に変化がなかった前置詞と継続相の動詞との合成語も、前置詞としての独立性を失ったことにともない、その空間的意味内容が動作の領域へと転用され、そして前綴は動作相の完了化のみをあらわすようになった。[8] このことが過去分詞の形態にも転用され、それ自身の中にもうすでに完了的意味を含んでいる前綴 er- や ver- などをもつ動詞では、過去分詞形において完了を示す目印をさらに付加する必要はないわけだが、こういった前綴をもたない動詞の場合にはその過去分詞形に ge- が付加されることとなったのである。[9]

III. Präfix がもつ意味の歴史的変化

1. be-

まず be- の形態を、歴史的にさかのぼって考えてみると、nhd. be- < mhd. be- < ahd. bi- < Gotisch: bi- となり、また be- と類似した前置詞 bei も mhd., ahd. bi < got. bi という形態をとり、つまり be- と bei は同じ語源をもっているのだが、このbi はさらに Indogermanisch の *bhi,*ambhi に由来するといわれている。そしてこの *ambhi は Ahd. の umbi、Mhd. の umbe と関係し、現在の um へとつながっている。そしてまた、Ahd. の副詞 bī (nhd. bei) が前置詞へと変化した際、すでに前置詞であったその別形 bi (nhd. be-) を排除、その結果 bi は前綴となったという経緯もある。behend(e) (bei der Hand) などは、be- が前置詞であったことの名残である。従って be- は本来前置詞の bei であって、さらに両者は共に um と同じ語源をもっているため、つまりこれら be-, bei, um はすべて「～のまわりに」という本源的な意味を共通して所有している語の集まりということになる。さてそうすると、 be- は「～のまわりに」という空間的な意味を基本にもっているわけだが、ここで Grimm は次のような例を挙げてこのことを説明している。[10] すなわち、sehen は「ただ単に見る」ということを意味するに過ぎないが、これに an- を付加し、ansehen にするとこれは「ある対象物をしっかり見据える」という意味になり、そしてこれが besehen になると、「あらゆる方面へ目を向ける」となりここで前綴 be- の中に um の意味が保存されていることになるというわけである。この他にも、bearbeiten - umarbeiten, befangen -

NII-Electronic Library Service

Otemae University

umfangen などの例が述べられており、be- の本源的な意味が主張されているのだが、これに対して ansehen, besehen の前綴 an-, be- がもつ意味を„Kontakt"「接触」ととらえる立場もある。[11] しかしこれも、sehen する対象物を「包む、包括する (umfassen)」というように、um を広義に解釈することで um との関連が意識され、したがって現在でも be- の本源的意味はまだ生きているものと考えていいだろう。そしてこの「包括する」という意味合いはさらに現象の全体的包括 (ganz und gar, völlig) [12] へと拡がり (bedrängen, bedecken, bekleiden, beschließen, bezwingen など) 、つまり Aktionsart に対して完了化作用をもつようになったのである。このようにして be- には、対象に対して完結した (完了的) 作用を及ぼす[13] という性質が備わったのだが、この性質は be- の他動詞化作用にもあてはまるように思われる。つまり、 ins Zimmer treten = das Zimmer betreten や et. besteigen, lügen - jmdn. belügen, bedienen, belachen, beleuchten といった例にみられるように、be- が付加されることによって対象への強い指向性、対象の包括的把握 (遂行) とでもいうべき意味合いが表現され、それによって4格目的語が明確化し、その結果動作相が完了化されたのではないだろうか。また、beengen, befreien, befestigen など形容詞から be- 動詞を派生させる場合でも、それらの語は完了的意味をもつ他動詞となり、このことは、beflecken, befrachten, beseelen など名詞から派生させた、「付与 (Versehen)」という意味合いをもつ be- 動詞についてもいえる。

このようにみてくると、現在 be- がもっていると思われる意味はそのほとんどが、そのままの形ではないにせよ、„um ～ herum"という本源的意味から発展、変遷してきたものであるといえそうである。[14]

2. ent-

ent- は形態的には、ゲルマン語の *and(a)- から発し、got. and > ahd. ant-, int- > mhd. ent-, en- と変化してきたものであるが、この前綴はゴート語においては前置詞として独立した語であって、„entlang, auf etwas hin"という意味を有しており、ゲルマン語以降非分離の前綴にのみ用いられるようになった。さてこのようにして前綴となった ent- は、元来ゴート語にみられるように、「方向」をあらわしていたものと思われるが、前綴としては „entgegen, gegen"「応じる、反応する、対応、(反対)」といった空間的意味を本源的にもっていたとみられている。ここで、現在われわれが認識している ent- (emp-) の意味のなかで、この本源的な意味がまだ生きている例を挙げてみると、entbieten, entgelten, entsprechen, empfangen あるいは名詞でアクセントをもつ Antwort などが考えられる。さてここから、本来の意味からのずれが生じ、基礎動詞の意味を Rückgängigmachen する、つまり、本来の「対応」という意味から転じて「逆

NII-Electronic Library Service

Otemae University

にする」という意味があらわれたのである。（entladen, entspannen, entwickeln, entwirren など）

これに対して enthaaren, entlarven, entlasten, entwaffnen, entschuldigen など、基礎名詞を「取り去る」（Wegnehmen）という、前述の「付与」を意味する be- と対照をなしているこの意味については、ent- の本源的意味との間に、直接的な関連を見い出すことは難しい。しかしながら、entkommen, entlaufen, entrinnen; entfliehen, entweichen など、3格名詞や von, aus などの前置詞をともなって用いられ、現在においては ent- の使用例のなかで90%以上を占めるといわれている[15] Trennung, Entfernung「分離、離脱」という ent- に古くからあった意味は、上で述べた「取り去る」という意味と関連づけて考えることができる。そしてこの「離脱」という意味から変化したものとして、entspringen, entsprießen などにみられる das Hervortreten in die Erscheinung「出現する」という意味が挙げられる。

さて ent- にはさらに Aktionsart に関係する das Geraten in einen Zustand、すなわち inchoativ の意味合いがある。（entblühen, entbrennen, entflammen, entschlafen, entzünden）これについてはまず、ahd. int- が前置詞 in と混同され、その結果 ent- が in の意味、つまり「中へ」という意味をあらわすようになったため、「ある状態の中へ入る」→「開始（Beginn）」という意味を ent- が担うようになったと考えられている。しかしこれに対して Behaghel は、この inchoativ の意味を「ある状態へ向けられた方向」（die auf einen Zustand hin eingeschlagene Richtung）であると解釈している。[16]

ここで、ゴート語ではまだ前置詞であった ent- がもっていた „auf etwas hin“ という空間的な意味合いを考え合わせてみれば、「ある状態へ向けられた方向」という考えも、ent- の本源的な意味からきているものと解釈できるのではないだろうか。もしそうであれば ent- に含まれる inchoativ の意味も、ent- の本源的な意味と結び付けて考えることができるであろう。

3．er-

次に er- について、まずその形態をみてみると、got. us > ahd. ur, ar, ir > mhd. er- となり、アクセントをもつ Nhd. の名詞の前綴 ur- とも er- は関係しているのだが（erlauben – Urlaub, erteilen – Urteil, erkennen – Urkunde）、この前綴は、古高ドイツ語期にも前置詞として機能していたものであり、そしてその本源的な意味として、ゴート語の us（nhd. aus）にもみられるように、„heraus aus, von“、つまり「中から外へ」という空間的な意味をもっていたのである。Paul はさらに加えて、„aus der Tiefe in die Höhe“「上方へ（empor）」という動きをこの空間的な意味に結びつけている。[17] こういった空間性は erleuchten のような語にもみられ、„herum“を原義にも

NII-Electronic Library Service

Otemae University

つ be- を付加した場合、„Das Haus war beleuchtet.“は建物の正面を外側から照らすということを意味するが、これに対して„Das Haus war erleuchtet.“では、建物の内部を内側から照らすという意味になり、本源的意味からくる違いが空間性に生じる。[18] しかしこういった元来の意味は、erlesen, erschließen, (ersprießen); errichten, erziehen などにみられるが、この空間的な意味は時間の流れとともに意識されなくなり、er- は現在では専ら ge- と同様に、動作相の完了化のために存在しているように感じられている。er- の「外へ」という動的なイメージは、それが名詞の概念と結びついたならば、その空間性を保持することができるかもしれないが、時間的経過を伴う動詞 „Zeitwort“と結合した場合、その空間的意味合いは容易に動作相へ転用されるであろうことは想像に難くない。er- と同じく空間的意味を本来もっていた be-（「～のまわりに」)や ent-（「対応」）と較べると、er- の「外へ」という動的なイメージは、動作や現象の時間的な側面に、よりなじみやすいものと思われる。そこで、この意味合いは „zum Ende hin“「完結へ」へと伸展し、結局 er- は、動作、現象、状態の「始まり」inchoativ と「終わり」resultativ を表現するものとなったのであろう。

さて、inchoativ には、erblühen, ertönen, erglühen, erglänzen, erbeben 及び形容詞から派生した erblassen, erstarken, erfrischen, erhöhen などがある。これに対して resultativ においては erbringen, erwecken, erzeugen などの他に、単に時間的経過の完了だけではなく、かなり具体的な意味合いが加わるものもある。他動詞化された erklettern, ersteigen, erreichen など、いわゆる「到達」をあらわす er- にはまだ空間的な意味が生きており、ここからさらにこの空間性が薄れ、erarbeiten, erkämpfen, erlangen, erlernen; erfahren などにみられる「獲得」という比喩的な意味が発達してきたものと思われる。

さらに resultativ の意味として、erfrieren, ersaufen; ersäufen, erschießen, erschlagen などにおける「死滅」という特殊な意味があるが、これは heraus → zum Ende hin → Zugrunde-gehen (-richten) という意味の変化過程のなかで把握できるものなのかもしれない。あるいはまた、er- と同根の ur- には、„hinauf, hinaus“から発し、古い時代 (Ahd.) には存在したが今日ではもはや感じられなくなった privativ,negierend という negativ な意味があることが Grimm には指摘されており[19] (urbau = wüstung, schutt; urholz = kein vollwertiges holz, abfallholz) 、これとの関係で、er- の Zugrundegehen という negativ な意味合いを把握することができるのではないだろうか。

このようにして er- においては、本来の空間的意味は時間とともに大きく変化しており、その本源的意味を現在では認識しにくくなっているといえる。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

4．ver–

今日の Präfixverben の約半数に付加されているといわれる前綴 ver–（mhd. ver– < ahd. far–, fir–）においては、現在では質的に異なるような多様な意味合いが共存している。その原因として ver– は、歴史的に３つの前綴が融合してできたものであることが知られている。ゴート語の、faur–, fair–, fra– がそれであるが、これらはさらに印欧語の副詞、形容詞 *per („die Vollendung einer Vorwärtsbewegung, ein Durchdringen zu etwas.“「前方へ突き進む」）を基礎としている。[20] そこでまず、この３つの前綴について faur– からみていくと、この前綴は前置詞としても存在していたもので、現在の für, vor とつながり、したがって空間的な意味合いを含んでいたものと思われる。今では「理解する」という語彙化した意味になっている verstehen に対して、本来は „vor einem Objekt stehen (und es damit besser wahrnehmen) “のように、「前に＋立つ」という空間的な意味をこの ver– に想定する見方もあり[21]、またさらに、„Stellvertretung, ein Eintreten vor oder für jemand“「代理」という意味から vertreten や verantworten が説明される。この「前に」という意味から、ver–legen, –stellen（さえぎる）, verrammeln; vermauern, verschneien といった„Absperren“「遮断」の意味があらわれ、こういった語に ver– の空間的な意味をみることができる。faur– はまた Mhd. の vür:„räumlich vor etwas hin, räumlich vorwärts, über etwas hinaus“という空間的移動をあらわす意味とつながっており、ここから時間的側面への転用が起こって、versäumen, verschlafen, verschwatzen などにみられる時間的超過 „vergeuden“ が表現されるようになったものと思われる。

さて次に fra– に由来する ver– であるが、これについてはまず、fra– の本来の意味 „fort, hinweg“ との関係から、verstellen, verpflanzen, verschieben, versetzen などのような空間（場所）の変化 „Raumveränderung“や、verbannen, verdrängen, verjagen, vertreiben にみられる「除去」„Beseitigen“という意味が考えられる。Paul も指摘しているように[22]、fra– に由来する ver– には„Zugrundegehen, Zugrunderichten, Verderben“という negativ な意味合いがあり、verblühen, verklingen, vergehen[23], verwehen（消滅）；verbrauchen, verfüttern, vertrinken, fressen（ver—essen<got. fra—itan）（「消費」„bis zum Ende“）；verbiegen, verkennen, sich versteigen, sich versprechen（「間違い」„falsch“）；verachten, verbitten, verkaufen, verlernen, verzeihen（「否定、反対」„Negation“）など、個別的には多様な意味に拡がっているがその根本は fra– の意味に求めることができる。次に fair–（＝heraus, hindurch; um – her）であるが、これに対応する語は現在ではほとんど残っていないので、ここでは言及しない。

ここで、Aktionsart に目を向けてみると、上記の「消滅」や「消費」という意味をは

NII-Electronic Library Service

Otemae University

じめ（resultativ）、ver- をもつ動詞にはすべて完了的な意味合いがあるが、ver- はまた、それ自体に negativ な意味をもつ動詞（schwinden, faulen, welken, tilgen など）と結合した際、ver- がもつ negativ な意味はもはや感じられなくなり、結局 ver- は、単に現象が終了したことのみを表現するようになる。その結果 negativ な意味をもたない基礎動詞とも結合し、その動詞を完了化するという機能を担うようになったという認識もある。[24]（verheilen, vermischen, verbinden など）

Grimm では fort, hinweg から発する多様な意味を、a）ein hinweggehen, hinwegschaffen vom bisherigen wege.（従来の過程からの離脱）と、b）ein fortgehen, fortschaffen auf dem eingeschlagenen wege bis zum vorgesteckten ziele.（従来の過程を遂行し所期の目標を達成する）という２つの方向に大別している。[25] a）に属するものとして「消滅」（vergehen, verlaufen）、「間違い」（verführen, verdrehen）、「否定」（verbieten, versagen）を挙げ、b）に対しては「完了（bis zum ende)」(verblühen, verbrennen, vertilgen）、「閉鎖」（verheilen, verbauen, versperren）、「消費」（verspielen, vertrinken）、「超過（über das ziel hinaus)」(verschlafen, versalzen）、「変化（verändern)」(verwittwen, verblassen; vergolden）などを設定している。ここでは、名詞からの派生によくみられる「付与（Versehen)」の意味を「変化」と分類している。また「消滅」をあらわす verblühen, verklingen などの ver- にはこれ以外に、印欧語からある本来の意味 „die Vollendung einer Vorwärtsbewegung“ や、あるいは単なる完了化機能をも認めることができ、融合的であるのだが、いずれにしても ver- については、その系統が複雑であり、現在の多様化した意味を本源的な意味から類推するのは困難であるといえる。

5．zer-

最後に zer- は、Mhd. では zer-,（ze-）、Ahd. では za-, zi-; zar-, zir- となりこれは、Ahd. の zi- と ir- が融合して、„ahd. zeirgangen“のように二重前綴添加（Doppelpräfigierung）を起こしたものと考えられている。ahd. za-, zi- や mhd. ze は現在の「過度に、～過ぎる」という意味の副詞 zu（あるいは前置詞の zu）につながり、ir-（＝nhd. er-）はすでに述べたように元来「内側から外へ」という意味をもっていたことから、これら二つの意味合いの融合が想像されるところだが、これら zar-, zir- に対応するものとしてゴート語に dis-, twis-, tuz- という形態があり、これらはさらにゲルマン語の前綴 *tis-、印欧語の *dṵis-, *dis-, *dus- へとさかのぼる。そしてこの *dṵis-, *dis-, *dus- はすべて du-„zwei“という語根から発しており、これらには „entzwei, auseinander; zweimal“という意味が含まれていたことが知られている。ここでこれらの形態を整理してみると、idg.*dṵis-, *dis-, *dus- ＞ germ. *tis- ＞

NII-Electronic Library Service

Otemae University

got. dis-, twis-, tuz- となり、dis-, tuz- が Ahd. ではアクセントのない前綴として s が消失し、za-, zi- という形が現れたということになろう。したがって、現在われわれが認識している zer- の意味というのは、この本源的意味から容易に類推できるものなのである。すなわち Fleischer は zer- の意味として、„teilen, zerkleinern“「分離・破砕」（zerbrechen, zerschneiden, zerstreuen）、„beschädigen“「破損」（zerknittern, zerkratzen; zerbeißen, zerkochen, zerschlagen）を挙げ、前者の zer- は、基礎動詞の意味を強調しており、後者においても、単に基礎動詞の意味を強調するものと、zer- 付加によりはじめて「破損」の意味が生じるものとに区別している。[26] このように、現在 zer- にみられるこういった完了的な意味合いは、本源的に存在していたものであるといえる。

Ⅳ. おわりに

以上のようにして、ドイツ語非分離前綴がもつ本来の意味とその歴史的変遷を跡付けてみたわけだが、これをまとめると次のような図式になる。

（本源的意味）　　（現在の意味）

ge-: „zusammen, Vereinigung“ [got. ga- (Vorsilbe)]
- fest werden
- (Perfektivierung)

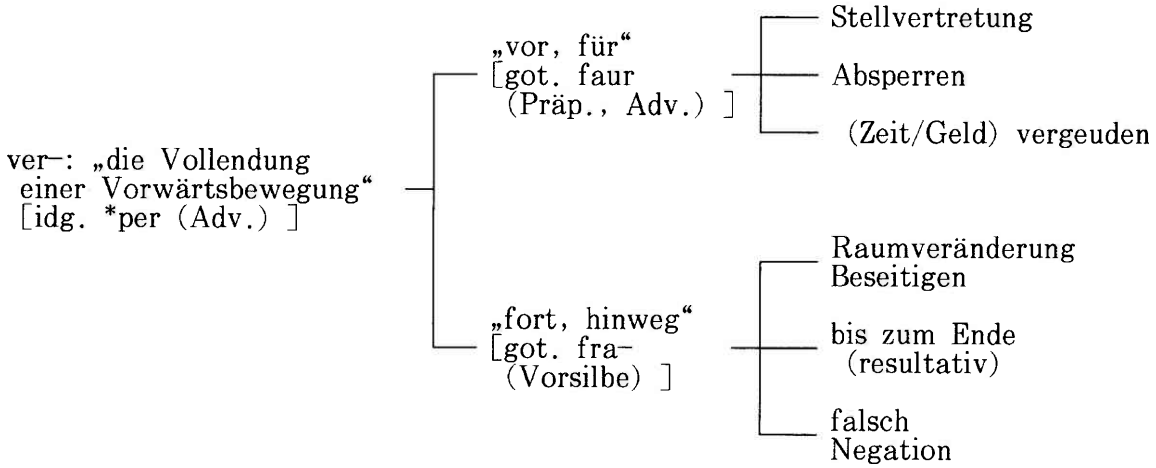
be-: „um - herum“ [ahd. bi (Präposition)]
- herum (umfassen, Kontakt)
- Versehen mit
- (Perfektivierung)

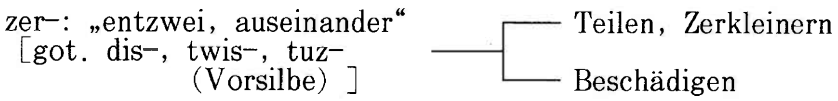
ent-: „entgegen < auf et. hin“ [got. and (Präp., Adv.)]
- entgegen
- Rückgängigmachen
- Entfernen
- Wegnehmen
- Erscheinung
- Beginn (inchoativ)

er-: „heraus“, („empor“) [ahd. ur, ar, ir (Präp.)]
- heraus, empor
- Beginn (inchoativ)
- Erreichen eines Resultats (resultativ)
- Zugrundegehen (resultativ)

NII-Electronic Library Service

Otemae University





このように、それぞれの前綴は空間性をあらわす本源的な意味から発し、あるものはその意味を保持し、またあるものはそれを基礎として様々に多様化した意味合いを発展させている。また、それぞれの前綴は独自の変化過程を経ながらも、erhellen – verdunkeln, erleuchten – verfinstern のように相補的に関係し合ったり、あるいは entsprießen = ersprießen, zerreiben = verreiben; beziehen ↔ entziehen などのような類似、対立関係を形成しており、歴史の流れと共にこういった前綴をもつ語の有機的なグループが組織されてきたように思われる。

注

1) Henzen, Walter: Deutsche Wortbildung. 3. Aufl. Tübingen 1965. S. 103.

2) „entbrennen“の動作相は、ゆるやかな開始を意味する inchoativ のほかに、突然の開始をあらわす ingressiv に分類されることもある。

3) Duden: Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. 4. Aufl. Mannheim/Wien/Zürich 1984. S. 425.

4) Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. 9. Aufl. Tübingen 1992. S. 312.

5) „gerinnen“の歴史的変遷をみてみると、ゴート語では„ga-rinnan: zusammenlaufen (von Menschen)“、古高ドイツ語では„girinnen: zusammenfließen“となるが、(Ahd.ではすでに) 今日認識されている„erstarren“の意味をも同時にもっていた。(Duden-Etymologie. 2. Aufl. Mannheim/Wien/Zürich 1989.)

6) Grosse, Siegfried: Durative Verben und präfigierte Perfektiva im Deutschen. In: Der Deutschunterricht. Jahrgang 15 – 1963 – Heft I. S. 96.

7) Trübners Deutsches Wörterbuch. Begr. von A. Götze, hg. von W. Mitzka. 8 Bde. Berlin 1939–57. Bd. 3. S. 33.

NII-Electronic Library Service

Otemae University

8）Grosse, Siegfried: ebd. S. 97.

9）kommen や finden など完了相の動詞では、Ahd., Mhd. においてその過去分詞形に ge-（gi-）は付加されない。ahd. quëman - quëman（quoman）, findan - funtan; mhd. komen - komen, vinden - vunden.

10）Grimm, J./Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854-1971.（dtv 5945）Bd. 1. S. 1203.

11）Kühnhold, Ingeburg: Zum „System" der deutschen Verbalpräfixe. In: Duden-Beiträge 37. Mannheim/Wien/Zürich 1969. S. 94 ff.

12）Pfeifer, Wolfgang: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen. 2 Bde. 2. Aufl. Bd. 1. S. 107.

13）Grimm, J./Grimm, W.: ebd. „die vollendete einwirkung auf einen gegenstand"

14）また be- には、今日ではまれになってしまった意味として、beharren, beruhen, bestehen などにみられる「静止状態」„Festsitzen, Beharren an einem Punkt oder in einem Zustand（Paul）"があり、Grimm では besitzen ＝„still sitzen"という例が挙げられている。

15）Duden-Grammatik. S. 423.

16）Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. S. 221.

17）Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. S. 228.

18）Fleischer, Wolfgang: Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache. 5. Aufl. Tübingen 1982. S. 332.

19）Grimm, J./Grimm, W.: ebd. Bd. 24. S. 2357.

20）Trübners Deutsches Wörterbuch. Bd.7. S. 372.

21）Kluge, Friedrich: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 22. Aufl. bearbeitet von Elmar Seebold. Berlin 1989. S. 763.

22）Paul, Hermann: Prinzipien der Sprachgeschichte. 8. Aufl. Tübingen 1968. S. 93.

23）Meid はこの vergehen を faur-（got.）に由来するものとしている。Krahe, H.: Germanische Sprachwissenschaft III. Wortbildungslehre. 7. Aufl. von W. Meid. Berlin 1969. S. 37.

24）Paul, Hermann: Prinzipien der Sprachgeschichte. S.93.

25）Grimm, J./Grimm, W.: ebd. Bd. 25. S. 54.

26）Fleischer, Wolfgang/Barz, Irmhild: Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache. Tübingen 1992. S. 327.

上記以外の参考文献

Bußmann, H.: Lexikon der Sprachwissenschaft. Stuttgart 1983.

Erben, J.: Deutsche Grammatik. Ein Abriß. 12. Aufl. München 1980.

Helbig, G./Buscha, J.: Deutsche Grammatik. 13. Aufl. Leipzig 1991.

Lexer, M.: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 37. Aufl. Stuttgart 1983.

Mackensen, L.: Ursprung der Wörter. München 1985.

Paul, H.: Deutsche Grammatik. Bd. 5. Wortbildungslehre. Tübingen 1968.（1. Aufl. 1920）

Schmidt, W.: Geschichte der deutschen Sprache. 6. Aufl. Stuttgart/Leipzig 1993.

石川光庸：「匙はウサギの耳なりき」　白水社　1993.

下宮忠雄：「ドイツ語語源小辞典」　同学社　1992.

NII-Electronic Library Service